

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 89

御葉袋順三郎と教え子たち(その2)

— まいばらの先人 ⑫ —

吉田久之助と松浦房造

前回紹介した開文学校現柏原小学校(校長の御葉袋順三郎の石碑には、七九名の教え子の名が刻まれています。吉田久之助もそのひとりです。

久之助は、柏原に帰郷すると氏神と先祖の墓前に詣でたあと、西の薬師(泉明院)に足を運ばれて、参道の松並木のなかに建っている御葉袋先生の碑を訪れたそうです。明治一一年長沢に生まれ(昭和一四年没)、幼少時代から小柄ではあるが体力にすぐれ、労働は大人に負けなかったといえます。小学校を終えて、家業の農業に精を出されたあと、亀屋左京(もぐさ屋)や名古屋の福助たばこ店に奉公して青年時代を過ごされました。このとき、柏原出身の松浦房造に出逢います。房造は明治一六年生まれ(昭和八年没)、一四才で京都に出て、おじの会社である松浦染料を継ぎ巨万

の財を築かれたそうです。名古屋の店で手に大けがを負った久之助に、

「思い切り養生手当するように」と五

〇円の大金を出されたことから、「こ

の人のためなら生涯をささげても悔いがない」と、以後、房造の片腕、

むしろ一体となつて松浦染料を成功に導きました。御葉袋先生の薫陶を

強く受けた久之助は、ふるさと柏原を愛し、教育を尊ぶ人でした。昭和

一一年一〇月一七日に新築落成した

柏原中学校の旧校舎は、久之助の寄贈によるものです。久之助に絶大な

信頼を置いていた房造も、ふるさと

の人材を多く自社に登用し、文化交

流や産業の発展、柏原の将来を願つ

て、社寺や学校への寄進。大正四年

には壬申の乱の戦没者をはじめ柏原

にゆかりの方々の菩提を弔つた無縁塔を建立。昭和七く八年頃に完成した大野木新道の建設にも私財をつぎこみました。

房造の頌徳碑が昭和一二年に村で建立され、碑文を安立寺の塾上駈道和尚が記しました。駈道は房造と同窓で、義兄弟でもありました。京都大学英文科を修め、昭和初年には龍谷大学に英文科を開設しています。昭和二十三年頃には柏原に戻つて、日曜学校、仏教青年会や婦人会などの教化に尽力されたほか、英語塾を開き、広く海外に目を向ける子どもたちの育成に取り組みました。直接・間接的に御葉袋順三郎に教えを受けた多くの人たちが、ふるさと柏原のために尽くしたのです。

山澤寛一と林道新設

猪の鼻の紅葉も木馬の音にゆるー河内から見上げる霊仙山は、四合目の高さくらいまで、杉や松の原木が美林をなしています。かつて、四季を通じて木を曳き下す木馬の音が響いた河内は、昭和四〇年頃まで林業でにぎわいました。河内を訪ねると、雄河内谷、雌河内谷、猪の鼻線など霊仙深く縦横に林道が開通していることに驚きます。最後に、河内の山澤寛一(明治七年く昭和二五年)を紹介します。氏の業績で村政や教育関係以上に特筆されるのは、森林開拓と林道開設です。ふるさと河内の発展

は山林開発にありと、率先して植林をおこない、大正七年には河内製材所を設立し、さらに、深山の良材を集荷するためには林道開設が必要と、梓河内施業土工森林組合の初代組合長として、大正一一年から一〇年計画で、総延長六八一三間(二二・三キロ)、総工費約三万円(約七千五百万円)の国庫資金を得て林道工事を先導しました。谷が多く、曲折を縫い、水が噴き出し、岩盤に遮られ、腐石が崩れる難工事だったそうです。雄河内谷の野神様の下の竣工記念碑がその歴史を物語っています。

※前回・今回の執筆にあたり、柏原宿歴史館前館長の日比野勇氏にご教示いただきました。

(歴史・文化財保護室)



▲ 林道新設記念碑